石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第427号　令和元年5月1日発行

脇田和と猪熊弦一郎 ～モダンの展開～

猪熊弦一郎《葉をくわえた女》1940 年
香川県立ミュージアム蔵 ―「脇田和と猪熊弦一郎」より―
©The MIMOCA Foundation

脇田和《二人》1942 年
―「脇田和と猪熊弦一郎」より―

前田家の刀剣・甲冑・陣羽織【前田育徳会尊經閣文庫分館】

春の優品選Ⅱ　茶道美術を中心に【古美術】

春のいろどり【近現代絵画・彫刻】

鳥とりどり【近現代工芸】

- ミュージアムレポート「おとのさまの文房具」
- 土曜講座について
- ミュージアムウィーク
- ５月の行事予定
- アラカルト ただいま展示中

第7·8·9展示室

脇田和と猪熊弦一郎 ～モダンの展開～

主催：石川県立美術館
後援：北國新聞社、NHK 金沢放送局、北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、北陸朝日放送

4月20日（土）～6月9日（日）　会期中無休

脇田和と猪熊弦一郎の共通点は多々あります。まず脇田が明治四十一年生まれ、猪熊が三十五年生まれの同世代であること、光風会、帝展への出品で交友を持ち、昭和十一年に新制作派協会を創立したこと。サンパウロ・ビエンナーレや、ピッツバーグ国際展など戦後の海外展への出品、建築物への大壁画や装飾品、緞帳などタブロー以外の制作を多数手がけたこと、何気ない小物を宝物のように見せる術（すべ）、晩年のハワイでの創作、長命であったこと。そして何よりも、この二人の作品が常にモダンで粋であったこと。

本展では第一部を脇田と猪熊の同年代の作品を十年単位で区切って、対照してみたのですが、時代との関連性もあるのでしょう。二人の作風が似通った時期がかなり見受けられ、興味深く画業の展開をうかがうことが出来ました。

戦後、抽象美術が流行ったころ、二人が描く画面は人体をシャープな幾何学的形態に近づけていきます。しかし、彼らはデッサンを常に自らに課した画家です。脇田は抽象に行くことはなく、ニューヨークに渡った猪熊は一九六〇年代に抽象へ移りますが、やがて具象へと戻りました。後者の七〇年代の作品には丸や三角四角が描かれるのですが、いずれも単なる色面ではなく、何かが描かれているのです。

二人の共通性と相違性、そして戦前戦後の変転の多い時代との関連性を、本展でご覧いただければ幸いです。

脇田和《アロハ》

学芸員の眼

日本の数多い洋画家の中で、猪熊弦一郎ほど多彩なスタイルを展開した画家はいないのではないでしょうか。

戦前、パリ時代、戦中、戦後、抽象画全盛の時代、アメリカでの二十年に及ぶ創作期、そして、病後の日本とハワイでの創作期、あたかも数人の画家が猪熊という一個人の中にいるかのようです。さらに三越デパートの包装紙のデザイン《華ひらく》、慶應義塾大学学生ホールの壁画《デモクラシー》、上野駅コンコースの大壁画《自由》を始めとする、公共建築の壁画や緞帳、そして『小説新潮』の表紙絵など、猪熊の仕事は人と社会とのつながりを常に念頭においたものだったといえましょう。

さて、多彩に変遷していった作風の中で、猪熊といえば、ニューヨーク時代の町並みを抽象化し、上下に並列していったクールな作品を思い浮かべる方が多いのではないでしょうか。確かに知的な画家の風貌とよくマッチします。

しかし、最晩年の例えば《飛ぶ日のよろこび》に見られる、顔と様々な鳥たちがたむろする作品のもつ自由さと不気味さはどうでしょう。妻を亡くした後に展開した「顔」シリーズと、鳥たちが異次元の世界に飛び立つよろこびを描くこの作品は、作者の死生観を述べたともの思えるのです。冷静と情熱を秘めた作品を描いた後、画家は平成五年、九十歳の生涯を終えるのでした。

猪熊弦一郎《Landscape GT》
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館蔵
©The MIMOCA Foundation

前田育徳会尊経閣文庫分館

前田家の刀剣・甲冑・陣羽織

4月20日（土）～6月9日（日）　会期中無休

毎年「百万石まつり」の時期に合わせて、加賀藩歴代藩主所用の甲冑や陣羽織を中心とした特集展示を開催しています。今回は二代藩主・前田利長所用の《鯰尾兜》の他、甲冑としては三代藩主・利常所用の《黒塗六十二間甲冑》が実戦（大坂の陣）で使用された最後のものとなります。そして、四代藩主・光高所用の《紫糸威萬歳甲冑》を見ると、武家で男子が十三、四歳になったとき、初めて甲冑を身につける儀式である「鎧着初め」に用いられたものと推測されます。このように、藩主所用と伝わる小ぶりの甲冑は、儀礼的用途のみのために作られた可能性が高いということができます。

加賀藩の文化政策が、幕府の警戒を和らげるためだったとする説に従えば、実戦を意識した甲冑を加賀藩主・前田家が作るなどということは考えられないかも知れません。しかし、このような視点に強く修正を迫るのが、五代藩主・綱紀所用の《笠形模楯無甲冑》の存在です。日本史上屈指の文化人大名と評価される前田綱紀ですから、「武」のほうはそこそこと思いがちですが、この甲冑は綱紀の学問の集大成として注目されます。具体的には、銃器による狙撃に対応する綱紀の思想が随所に反映されているということで、「楯無」の名称にも必然性があります。

前田家ゆかりの甲冑といえば、藩祖・利家所用の《金小札白糸素懸威胴丸具足》が連想されますが、綱紀所用のこの一具も、文武二道を家風とした前田家にふさわしいものということができます。

《紫糸威萬歳甲冑》前田光高所用

学芸員の眼

前田家は、幕末まで徳川家との婚姻関係がありましたが、その背景には、幕府との緊張関係があったという事実を看過することはできません。前田綱紀の甲冑を注視すると、そのことを改めて痛感します。綱紀は射撃の名手だったと伝えられていますが、《笠形模楯無甲冑》を展示する度に、これは趣味の次元の問題ではなく、切迫した状況を勘案して作ったものであると思い至ります。そこには、三十歳で世を去った父・光高に対する思いもあったことでしょう。そして、綱紀の武運長久を誰よりも願ったのが、祖父の利常でした。今回展示している「瑞龍寺奉納刀」のうちの貴重な伝存品である、藤原長次による一口もそのことを痛切に物語っています。

したがって《笠形模楯無甲冑》から、祖父の願いを真摯に受け止め、日常の注意を怠らなかった綱紀の姿勢が確認されます。

《笠形模楯無甲冑》前田綱紀所用

第2展示室

春の優品選Ⅱ

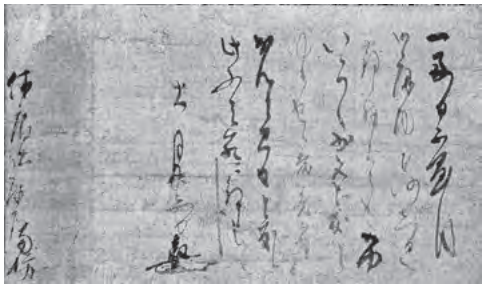
茶道美術を中心に

4月20日(土)～6月9日(日)　会期中無休

Ⅱ期では、千利休と高山右近ゆかりの作品を新たに展示しています。このうち利休ゆかりとして第一に注目していただきたいのが県文《黒楽茶碗　銘北野》です。利休所持と伝わる黒楽茶碗のなかでも、作為を排した端正な佇まいが独特の風格を醸し出しています。さらに利休の孫・宗旦による「信長公拝領利休居士遺具」との添書が、祇園会を描いた絵巻の断簡とともに一幅の掛軸に仕立てられている県文《祇園会図》も、織田信長の茶頭を務めた利休の生涯を知る貴重な史料といえます。

そして、「利休極上一の弟子」と認識されていた高山右近については、現存する数少ない右近自筆書状の一つである金沢市文《高山右近書状》が第一に挙げられます。これは茶人で家柄町人の片岡休庵（孫兵衛）に宛てたものであり、内容は、先日より懸案の鶴の羽箒が出来上がったのでお見せしたい。ゆわせた者が今晩来るから、あなたにもお越しいただき是非見せたいので返事を待ちます、というものです。

羽箒とは鳥の風切羽を三枚重ね、羽柄部分を竹の皮などで包み、結って作った箒です。茶事の炭点前のとき炭や灰の粉が散るので、風炉、炉縁、炉壇、五徳の爪、釜の蓋などを清めるために用いられ、特に鶴や鷺のものが珍重されました。書状において、右近が休庵に出来上がった鶴の羽箒を是非見せたいと熱く語っていることから、キリスト教信仰者の間では、鶴の羽箒が特別の意味を持っていたことを感じさせます。



金沢市文《高山右近書状　休庵公宛》

第3・4・6展示室

春のいろどり

【近現代絵画・彫刻】

4月20日(土)～6月9日(日)　会期中無休

この展示が始まった春満開の時期から、季節は夏の訪れを感じさせる頃へと移ってきています。そんな季節の移り変わる華やかな変化も、この時期の魅力ではないでしょうか。絵画・彫刻の各分野の展示作品をご紹介しましょう。

風景や植物だけのものでなく、特に女性の衣装は季節を演出する格好の道具にもなります。日本画の鹿見喜陌《街に》は、五人の女性が違う花模様のワンピースを身にまとい、現代の女性を表現。同じく羽根万象《丘の家族》の女性三人は、薄着に裸足でくつろぐ作者の家族を描いたもの。丘に建つ白いバルコニーは成功を象徴しています。

洋画部門では、前号の小絲源太郎や村田省蔵、新保甚平に加え、金山平三の《杏花》、高光一也の《鶴仙渓の春》、森本仁平の《早春の岸辺》なども展示いたします。金山の作品は小さな桜板に書いた小品ですが、板の地色を生かし、その上に杏の白い花を散らせた佳品です。高光の作品は山中の鶴仙渓を俯瞰で捉え、おおらかなタッチで描いています。晩春の頃でしょうか。森本の《早春の岸辺》は作者が住んでいる千葉の景色ですが、細やかで深い味わいのある描写が、眼を引きつけて止みません。

彫刻部門では、人物や鳥など春の生命感をテーマにした作品を紹介しています。吉田三郎は人物彫刻で有名ですが、現在展示中の《駝鳥》や《雛》など、鳥をモチーフとした作品も得意としています。また、長谷川八十《軍鶏》は、二羽の軍鶏が今にも飛びかからんばかりの緊迫した雰囲気が感じられます。生命感溢れる彫刻作品をお楽しみください。

羽根万象《丘の家族》

第5展示室

鳥とりどり【近現代工芸】

4月20日(土)～6月9日(日)　会期中無休

本展示では工芸作品とともに、鳥の写真をご紹介します。セキレイやスズメ、サギなど実に身近な存在ではありますが、鳴き声や正確な特徴まで観察する機会はなかなかないかもしれません。当然のことながら、作家は図案に写実性だけを求めるわけではありません。特徴を踏まえつつ、構成や色彩、抽象度の高低が定められてゆきます。鳥というモチーフを介し、皆様にもその過程を想像していただければと考えています。

具体的な例を挙げてみましょう。金工作家・山田宗美の《鉄打出鳩置物》は、瓦にとまり少し尾を上げたハトをモチーフにしています。嘴の先はやや丸みを帯び、目は丸く、ふわふわとした羽毛の手ざわりまでも感じられる作品です。着色こそしていませんが、かなり写実性の高い作品といえます。一方、人形作家・下口宗美の《木彫加彩人形「つつ井筒」》では、童子がハトを象った杖のようなものを持っています。第六回石川県工芸作家選抜美術展図録に、作者は「誰しもあるであろう幼な馴染みの懐かしい想い出を王朝の風俗に託して…。金彩砂子がどこまで生かされたか?」と思いを寄せています。童子の姿は丸々と表され、金砂子を散らした装束があでやかさを添えます。キジバトらしい鳥の羽根は、男児がまとう装束と調和するよう、青、緑、金色に明るく彩られています。これは実際のハトとはかなり異なる色彩でありますが、「想い出」や「王朝風俗」を思わせるにぴったりの表現です。各作家の意図を、とりどりの作品から感じ取っていただければ幸いです。

下口宗美《木彫加彩人形「つつ井筒」》

ミュージアムレポート

キッズ・プログラム鑑賞講座

おとのさまの文房具

2019年3月3日(日)実施

三月三日、前田育徳会尊經閣文庫分館の展示室で開催の特別陳列「天神画象と文房具」を鑑賞する小学生親子対象のキッズ・プログラム「おとのさまの文房具」を開催しました。

今年四年目となる小・中学生対象の体験イベントのスタンプラリー「出世街道」の導入で、キッズ・プログラムは近年定員を設けています。毎回、十三時から受付開始となっておりますが、今回は、受付開始十分後には定員に達し、開催時間を早めて開講しました。

今回、展示されているのは、三代藩主利常を中心とした前田家藩主たちに大切にされていた文房具です。日常生活の中で、筆を持って字を書く機会がなくなった今、まず、自分たちが使っている文房具や、お気に入りの文房具にも想いを馳せ、自分たちの文房具と比較して関心を持ってもらうことから鑑賞を始めました。愛らしい動物の形や装飾の美しいものなど、書の道具というより工芸品のような展示作品について、その用途もクイズで考えてみました。また、文房具の展示ということで、学問の神さま菅原道真の天神画像も紹介しました。最後は、ミュージアムウィークのイベント「スケッチGO!」でお馴染みの磁気式ボードで、お気に入り作品をスケッチしていただき、はがきにプリントアウトして参加の記念にお持ち帰りいただきました。

初めてこのキッズ・プログラムに参加した方が多かった今回の講座でしたが、保護者の方の展示への関心も高く、親子で存分に楽しんでいただけた講座になりました。

2019年度の土曜講座を開講します

5月から本年度の土曜講座を開講します。当館学芸員が日ごろ研究しているテーマや、開催中の展覧会に関連したテーマで本年度は26回行います。お気軽にご参加ください。

毎回午後1時30分より3時まで。事前申込不要、聴講無料です。

	月	内　　容	担　当
1	5月11日	元屋敷陶器窯とその製品	奈良　竜一
2	5月18日	脇田さんと猪熊さん－企画展を楽しむために－	前多　武志
3	5月25日	千利休と高山右近	村瀬　博春
4	6月8日	猪熊弦一郎とアメリカ美術	二木伸一郎
5	6月15日	脇田和の素描・版画作品	深山　千尋
6	6月22日	人形　技法と歴史　伝統工芸	寺川　和子
7	7月6日	絵画の見方－主題いろいろ－	中澤菜見子
8	7月13日	加賀藩お抱え絵師　佐々木泉景	有賀　茜
9	7月20日	時代背景から読む美術	前多　武志
10	9月7日	再考　美術館開設60年（1）	高嶋　清栄
11	9月14日	県美油絵収集のあゆみ	二木伸一郎
12	9月21日	石川県立美術館収集のあゆみ	谷口　出
13	9月28日	石川県立美術館の古美術コレクション	村瀬　博春
14	10月5日	近代工芸と茶道具	寺川　和子
15	10月12日	明治期の工芸教育－納富介次郎の先駆性－	鶴野　俊哉
16	11月9日	『能楽』をつくった加賀藩主 13代前田斉泰（上）－江戸後期、加賀宝生の隆盛－	村上　尚子
17	11月16日	中国陶磁あれこれ2019	奈良　竜一
18	12月7日	古九谷と加賀蒔絵	村瀬　博春
19	12月14日	展示を楽しむ鑑賞法あれこれ（実践編）	深山　千尋
20	1月11日	デザイン教育の黎明－金沢美術工芸専門学校開校前夜－	鶴野　俊哉
21	1月18日	再考　美術館開設60年（2）	高嶋　清栄
22	1月25日	髹飾録から読み解く漆芸技法	有賀　茜
23	2月1日	中国の茶書を読む5 －『茶録』宋代の茶と茶器を知る－	村上　尚子
24	2月8日	工芸作品と模倣	中澤菜見子
25	2月29日	『能楽』をつくった加賀藩主 13代前田斉泰（下）－明治初期、子利鬯とともに－	村上　尚子
26	3月7日	仏像を語る	谷口　出

兼六園周辺文化の森

春のミュージアムウィーク

2019年4月27日(土)～5月6日(月・振)

兼六園を中心とする半径約一kmの範囲は、藩政期から近代に至るまで各時代の歴史が重層的に集積する石川県を代表する緑豊かな文化空間となっており、数々の文化施設や公園緑地が整備されています。

石川県では、このエリアを「兼六園周辺文化の森」として、各文化施設での展覧会や、施設間で連携したミュージアムウィークの開催などを通して、文化の創造と交流、ふれあい空間の創出をめざしています。

この春も四月二十七日(土)から五月六日(月・振)の期間に、各施設でさまざまなイベントを行います。当館関連のイベントをご紹介いたします。

◇展示「パネルによる修復実績の紹介」

平成三十年度の石川県文化財保存修復工房の修復実績について、指定文化財を中心にパネルで紹介します。五月一日(水・祝)には展示解説を行います。詳細は下記の行事予定をご覧ください。

会場／石川県文化財保存修復工房見学スペース
会期／四月二十七日(土)～五月六日(月・振)
時間／午前九時三十分～午後五時　会期中無休
入場料／無料

なおミュージアムウィークのイベントに関するお問合せは、左記まで。

兼六園周辺文化の森等活性化推進実行委員会
(石川県文化振興課内)
電話／〇七六－二二二五－一三七一
(平日午前九時～午後五時)

5月の行事予定

■修復技術者による展示解説　①10時30分～11時　②14時～14時30分
石川県文化財保存修復工房見学スペース　無料

1日(水・祝)　修復技術者が修復作品や修復内容を解説します。

■いしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭　ロビーコンサート
①13時～　②15時～　当館ロビー　無料

3日(金・祝)　いしかわミュージックアカデミー弦楽四重奏団の方々が、石川県の特産である輪島塗を施した美しい楽器による弦楽四重奏と、本格的な室内楽演奏をお届けします。申込不要。各回30分程度の公演です。

■0才からのファミリー鑑賞会
①5日14時～15時30分　②6日10時～11時30分　要観覧料

5日(日・祝)　小さなお子さんと一緒に美術館を楽しむ方法をご案内。

6日(月・振)　電話にて申込。

■集まれ、鳥たち！美術館の森へ
9時30分～12時　無料

11日(土)　バードウォッチングの後、美術館の窓を飾る鳥シールを制作。電話にて申込。

■土曜講座　13時30分～15時　美術館講義室　無料

11日(土)　「元屋敷陶器窯とその製品」　学芸員　奈良竜一

18日(土)　「脇田さんと猪熊さん－企画展を楽しむために－」　担当課長　前多武志

25日(土)　「千利休と高山右近」　担当課長　村瀬博春

■「脇田和と猪熊弦一郎」展ギャラリートーク　11時～　要観覧料

会期中の日曜日※4月21日を除く　展覧会の担当学芸員が展覧会の見どころや出品作品について解説を行います。

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.37

《片切沈金彫鴎文棚》かたぎりちんきんぼりかもめもんたな

幅45.3㎝×奥行36.5㎝×高さ85.7㎝　昭和32年(1957)第13回日展

藤井観文　ふじい・かんぶん

明治21年(1888)～昭和48年(1973)

輪島市生まれの観文は橋本佐助に沈金を学びました。輪島漆芸を語る上に欠かせない沈金は、沈金刀と呼ばれる鑿(のみ)で彫り出した文様に漆を擦りこみ、金銀箔や金属粉を綿で叩き込む技法です。すると漆が接着剤となり、文様部分にのみ色が残るのです。現在ではプラチナをはじめ、様々な金属が用いられます。しかし観文の場合には金を主体とする作品がほとんどで、本作品もその一つです。

沈金では鑿の種類、彫口の角度や深さがそのまま文様の味わいに結びつきます。小さい点をたくさん打って動物の柔らかさを、鋭い線で生命力に満ちた葉をと、モチーフにあわせて道具を持ち替え、彫りに変化をつけるのです。観文が好んだのは片切彫という、片側に刃のついた鑿を用いる技法でした。毛筆で描いたかのように、表情豊かな線が特徴とされます。

経歴を辿ると、これは彼に打ってつけの技法だったと考えられます。漆芸を学んで後上京、川合玉堂に師事し、絵画の分野で日本美術院展、帝展に入選を果たしました。当館でも二点の日本画作品を所蔵しています。いずれも明朗な色彩を使った花木の姿が印象的です。一方、工芸分野でも日展で特選を得て、後半生は漆芸作家として歩みました。

本作品には、制作時の図案が残されています。写実性からスタートしつつ、徐々にモダンな図案へと変化していく過程がうかがわれます。片切彫の表現力を活かすべく、試行錯誤が重ねられたように思われるのです。彩り豊かな絵画世界を経た観文は、黒と金の沈金世界を、筆線追究の場として受け止めたのかもしれません。

次回の展覧会

令和元年6月14日(金)
～7月22日(月)
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第２展示室
絵画優品選	名刀と刀絵図

第３・６展示室	第４展示室	第５展示室
新収蔵品と優品 【近現代絵画・彫刻】	村田省蔵展 【近現代絵画】	手わざの手ざわり 【近現代工芸】

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　360円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金
5月6日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

5月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

5月は無休で開館しています

リフォームを検討されている方は是非!
そんなときは
「リショップナビ」
をご利用ください!当社オススメの
リフォーム会社を複数社ご紹介致します。
サービスの特徴
❶効率的に優良リフォーム会社を!
❷比較で工事費用がオトクに!
❸独自のリフォーム保証
まずはお電話で無料相談♪
専任のアドバイザーがお答えします!
0037-6001-64106
【受付時間】10時～21時(土日祝は19時)
リショップナビ
運営会社:株式会社アイアンドシー・クルーズ
東京都港区新橋1-18-16 日本生命新橋ビル5F
広告

石川県立美術館だより
第427号(毎月発行)
2019年5月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。